

全層性炎症や類上皮肉芽腫を認め、クローン病と診断された。

### 17. 特異な経過を示した結核性小腸狭窄の1例

(谷津保健病院) 永田 仁

症例は35歳、男性。1990年7月、腹痛、腹水、胸水、発熱にて当院内科入院。内視鏡検査にて十二指腸下行脚に潰瘍を認め、生検にてクローン病が疑われたが確定診断には至らなかった。対症療法にて軽快し、翌年2月退院。1992年1月、亜腸閉塞にて入院。胸部レ線像にて両肺野にびまん性陰影があり、診断的治療として抗結核剤投与を開始したところ全身状態は軽快した。造影に回腸に2カ所の輪状狭窄を認め、3月腸切除を行い、病理組織像より腸結核と診断し得た。全経過を通じ、ツ反は陰性～疑陽性だった。以上、特異な経過を示した結核性小腸狭窄の1例を経験したので報告する。

### 18. 消化器外科領域における深在性真菌症の診断基準と患者背景

(第二外科) 稲田直行

深在性真菌症の診断に血清学的診断法が注目され検討されている。今回、我々はCAND-TEC、 $\beta$ -D-グルカンによる当科の診断基準を設け、この基準値により深在性真菌症の診断および患者背景について検討した。CAND-TEC $\geq$ 2+かつ $\beta$ -D-グルカン10pg/ml以上では感度78%特異度100%で最も成績がよく、CAND-TEC $\geq$ 2+かつ $\beta$ -D-グルカン10pg/ml以上を当科の診断基準とした。この基準値により深在性真菌症と診断した症例を見ると、悪性疾患患者、compromised host、長期IVH施行者に多い傾向にあった。また、抗真菌剤投与によるCAND-TEC、 $\beta$ -D-グルカンの推移を見ると、ほぼ治療効果、病態を反映していると思われた。

### 19. 腹腔鏡下胆嚢摘出術における術中超音波検査について

(第二外科) 釘宮睦博

腹腔鏡下胆嚢摘出術はその手術侵襲、術後入院期間の短縮さらには美容的な面からもその有用性において近年盛んに広まった術式である。

本術式においてそのポイントは胆嚢管、総胆管、尿管系の同定、術中胆道損傷の予防、および総胆管内の遺残結石の検索である。術中胆道造影は基本的に全例に施行している。術中超音波の目的は胆嚢管剝離に先立って、オリエンテーションをつける目的、また術中造影時のカテーテルを用いて生食水にて胆道系を拡張させ総胆管の詳細な情報を得る目的である。現在、当

科では硬性のリニア型プローベを使用しているが、胆道系を部位別に分けその画像描出能について検討した。

### 20. 大腸癌肝転移における胆嚢内胆汁 CEA 測定の意義

(第二外科) 荒武寿樹

CEAは、1965年GoldとFreedmanによって発見された。胎児大腸組織と大腸癌組織に共通して存在する糖蛋白であり、腫瘍マーカーとして広く臨床応用されている。

胆汁中のCEAについても、Yeatmanらの報告以来、大腸癌の肝転移との相関関係を示唆する報告があり、大腸癌早期肝転移の予知への応用が期待される。

当科においてもすでに、大腸癌約50例について検討されているが、胆嚢内胆汁の物理化学的性状などにより、その測定値にはばらつきがある。

測定に際して、血清、生理食塩水による希釈などの工夫がなされているが、いまだ確立された方法はない。そこで、今回、これまでの当科の検討結果を示すと共に今後の検討課題について報告する。

### 21. PyNPase 活性測定の意義

(第二外科) 田中新一

PyNPaseは、生体内で核酸合成に携わる酵素であるが、これは消化管や悪性腫瘍組織内に存在する。PyNPase活性の高い癌組織は、転移や悪液質を誘導しているという説があり、胃癌では予後不良と言われている。今回、乳癌症例において腫瘍組織内PyNPase活性と予後因子との間に、関連性があるのではないかと考え、活性値と各種背景因子との検定を行った。検定した因子は、腫瘍径、組織型、レセプター、性ホルモン、リンパ節転移、リンパ管侵襲、静脈侵襲である。有意差を認めたのは、リンパ節転移とリンパ管侵襲因子であり、PyNPaseが将来予後因子となりうる可能性を示唆した。

また、抗PyNPase抗体を使用し、腫瘍組織免疫染色することが可能であり、血管新生、静脈侵襲などとの関連をみるのに有用と考えられ、現在検討中である。

### 22. 大腸癌切除症例における予後因子の検討—組織学的パラメーターを用いた定量的解析—

(第二外科) 今井俊一

〔目的〕大腸癌の肉眼像および顕微鏡像についていくつかの病理組織学的パラメーターを設定し、それらが大腸癌の生物学的悪性度の指標となりえるか否かを検討する。